

層雲青年句会報 第二号

平成2年5月7日

発行
平田栄一

第二回青年句会は、去る四月二十九日(日)日暮里サニールにて開催。十三時から句会、十六時から二次会、十七時から三次会と前回以上の盛り上がりでした。出席は、久魚・白雲子・まおあきら・栄一、それに丸山みさをさん(まおあきらの友人)が初出席。出句者は以下のとおりです。

句評

渚伝いに蝶が飛ぶ暖流迂回期

恵行

2点。「イメージが沸く句だ。「白い蝶」などとしたらもっと鮮明なイメージをもつだろう。「蝶と暖流のくみ合わせ、春のイメージがよくでている。「詠んでることは平凡なのに、「暖流迂回期」などという堅苦しい言葉を使っているの自分では選ばなかった・・・」

夏をのみ込んだ焼けっぱちの一杯のビール

和広

1点。「余計な言葉があるような気がする。「焼けっぱちの」とか。この言葉でなくてもむやくしゃした気持ちを表せるのではないか?」「いや「焼けっぱちの」があるからイメージがはつきりして「一杯のビール」で気持ちの決着を付けようとする、人間の生活感がよく出ている。リアリティがある。「わかりやすくはなるが説明的になるし、句の広がりや狭めてしまう。「これだけの長さで詠んでいるわりには、もうひとつイメージがはつきりしない。「焼けっぱち」と「夏を

飲み込む」ゆもあまりにもイメージがつきすぎていりし、俳句としては冗長になってしまっているように思う。」

風がうなつて輪になる池の波紋

和広

1点。註＝「波」は投稿では「破」になっていた。「俳句の場合、字を直すのは危険だ。「ほんとうに「破」る紋だとしたら、もつとこの句はよいと思う。「造語については?」「おおいに賛成。「使う必然性があれば造語してもよい。「定型にはあの世界でしか通用しないような造語がいつばいあるが、安易に使われると危険。「その人の生きざまからやむにやまれず使ったことばならよいが、単に自分を飾るため使うとしたら問題。その辺をかんじとれるように読みたい。「写生句としてはいまひとつ。」

ある夜は静寂に身を沈め孤独を楽しむ

千代子

0点。「平凡なことを詠んでいるが、深い意味があるのではないか。それにしても「孤独」などと生の言葉が出ている。「孤独」といってしまうところは、安易だ。「孤独を楽しむ」はあまりにもいわれすぎていり。「俗っぽくなってしまう。「独白文になってしまつては・・・。しかし独白であるからよい俳句といつものもある。」

皿に盛った苺の快い距離にいてくれる人

千代子

4点。最高点。「「快い距離」がよい。「これは「苺」だからよい。「苺」だと詩にならない。皿に盛ったやわらかいイメージ、可憐なものが盛られているときは、ガツガツ前に出てはいけない。つかず離れず、程よい距離に相手がいてほ

しい。「じつにうまい句だ。」「の距離」とか「時間」とかを生のまま使うことは比較のおおいが。大会などでは高得点になるだろう。「層雲」とかかわりない立場からいって、素直にさりげない、さわやかな感情がでている。

白い時間がちぎれちぎれに病臥する

踏青

1点。「説明するとわからないが雰囲気はよく伝わってくる。「病臥して感じてるのが白い時間だとしたら作り方がうまくない。他のことをいつているのなら別だが。「考え方のカテゴリーが違うのだから、句を正しく理解するのはむずかしい。「この句の「に」をとってみてはどうか。「添削では逆に付けられてしまうことも多い。「わたしはこの句の感傷が好きでないので採らなかつたのだが、「に」をとるとその感傷がなくなる。おもしろくなる。「ドライになる。「に」を入れるとその前の言葉が全部病臥に掛かってくる。感傷に流れてしまう。「に」をとればそれがざりざりのところでおさえられる?」「作者が感傷に頼らなくなる。「に」を入れたほうがゆつたりすると思うが。「句に余裕ができるということか。」

表えて母がほどこき始めた「緒」

踏青

2点。「ちよつと不親切な気がする。いつていることはなんとなくかわかるし、時間を掛けて読んでいけばわかってくるのだと思うのだが。」「緒」は母と子の絆みたいなものをいつているのだろうか?」「もし絆だとすれば、これは非常に衝撃的な句だと思う。つまり、母が衰えてくると子との絆も薄くなってくるという。子供としての我々にと

つては、母というものは衰えていけばいくほど絆・子への愛情は強くなつていつてほしいものだから。「こういう解釈はまるつきり誤解かもしれないけれど。「日本の母親というのは、まだ家族の喜びを自分の喜びとして生きてきているところがある。そういうなかで、自分が歳をとつて体も十分さかなくなつていく。家族の世話が十分できなくなつて、厄介者になつていく。家族はまだそう思つてなくても、当事者である母は敏感にそれを感じ始める。そのとき自分がはじめて「主体性」に目覚める。それが「ほどこき始めた「緒」という表現になつたのではないか。理屈っぽくいえば、閉じこめられていた主体性にはじめて目覚めたときの人間を詠んでいる。「ただそれを詠むにしても、句として少し難しすぎる。」

枕木が冬の銀河にもらす深い告白

白雲子

1点。「この「告白」もさつき「距離」とおなじように、よく使われる。「告白」の使い方は難しい。「単純にカツコイイと思つた。しかし「告白」という言葉はそんなに生きてはいない。「月夜の電信柱」みたいに俗っぽい使い方になつてしまう。「風景としてはわかりやすい。凍える銀河の下のレールの枕木、そこに物思う人がいて。」「わたしは「告白」にどうしてもひっかかる。「枕木」の(が)「告白」。読者側としては読み込めばいくらでも解釈できると思うが、作者の作る姿勢が安易な句だと思う。「層雲」じゃなくてもこういう句は他の自由律句誌によくある意味では主流になつている。こういうのを主観的な句とすれば、けっこう他にも多い。むしろ層雲のほうがまだ読者にわかつてもらおうという傾向が強いと思う。こういう句ばかりつくつていくと、読者に伝えるという意味での力量はあ

まり育つていかない気がする。」

アウスビッツ、六トンの遺髪

白雲子

0点。「こういうのを生煮えの句というのかな。ぼくも層雲に入つてすぐ「君の句は生煮えだね」といわれたけれど、これよりは生煮えではなかった。状況をあまりにもその物ままだと詠んでいる。「さつきの「主観的」ということとかかわつてくるけど、もうちよつと主観が入らないと、その人の作品ということにならない。これに何を感じたのかが問題なのであつて、「それがどうした」と聞きたくなる。「こういう句を読むとつらくなる。それは(いま言ったような)現実をそのまま詠んでいるという意味ではなく、こういう状況は人それぞれにある程度知つている。それをこういうふうにする」と書いてしまうことがつらい。ある意味で勇気なのかもしれないけれど……。」

もう歩いて帰るほかない深閑と月夜

久魚

1点。「ほかない」はあきらめで使用するときと、決意で使うときとある。下句の暗いイメージとの対比でうまくそれが出ている。あきらめか決意か決めかねる曖昧さがよい。「深閑と月夜」はちよつと安易だが、今の評で救われた感じ。「層雲」のなかにはあまりにも俳句とはこういうものだと決め込んでいる風潮もある。「あまりにも句に「つくりあげてしまう」ということ。「上句から下句へきて、気を抜いてしまった感じ。句を作るときに、最後の言葉が決まらないということがよくある。それが決まらないばかりに出せない句が百も二百もたまってくる……。「しかしそういうつくつていくという態度にはあまり感心しない。俳句とい

うのはそのままの感動を出せばいいのであつて……。「いや、たとえはこの句で「深閑」といつてしまえば自分の感動がこの言葉に規定されていく。そういうふうには規定されたくない自分なりの「月夜」であつたかもしれないから……。「自分の場合、むやみに推敲していくと実にいやらしい句になつてしまう。下手をすると類句になつてしまう。だから今はあまりそれをしないようにしている。放哉の句などあまり推敲してはいないと思う。「いやよく推敲したと思う。」

和美

月満ちてしんじつ魂のほどけゆく

1点。「いかにもクラシック。「さつきの「孤独」とか「告白」と同じように「しんじつ」とか「魂」ということをそのまま出してしまつと、俗っぽいという感じがしないでもないが、突破口を求めて生きていた場合に、こういう瞬間がある。その時はこういうふうにしかならないのだと思う。人が聞けば陳腐・俗っぽいと思われるかもしれないが……。こういう瞬間というのが人生には何回かあるのではないか。そういう瞬間にあつたのではないか。「そういうふうには解する」といつて通俗的でも陳腐でもない。こうとしか書けないものとして受け取る。「そういう時つていうのは、短律的にパツと出るよね。どう思われても構わないから、こういうふうにしかならないと今気が付いた……。「いい句・素晴らしい句だと今気が付いた。」

何知らず咲くあざみ似る子に落ちる日

和美

0点。「どこで切るのだろう?」「あざみ」で切つてしまつと「似る子に」がわからない。「あざみ」に「を入れれば散

文的になつてしまふけど意味はわかる。作者の意図とちがつてしまふかもしれないが。「落ちる日よ」としてみると重点がそちらにかかつてわかるかも。「あざみに似る子だとしても、「あざみ」とはこうだという通念に頼つて句を作るといふのはどうか。「たとえばもつと可憐な花とかならそのイメージでつくるというのわかるが、あざみにそういう強いイメージがあるだろうか?」「この場合のあざみはけつして幸せをイメージするものではないだろう。「あざみ」といふ花の性質・花言葉といったものまで知つたうえでなければ解釈できないとなると、やっぱりそれは理屈になつてしまふ。「憂いをもつたイメージかな?」「でもあざみの花そのものは生命力もあるし、刺も問題になる。そういうものにひっかけるとしたら・・・。「哲学的な感じもする。」

息づきて山動き来るふるさとに立つ

和美

1点。「無難ですね。「ふるさとへ帰る感動、電車の窓からふるさとの山がどんどん近付いてくる。そして駅に立つ。「たつは「佇つ」というのをよく使う。でもこの場合、「立つ」だから毅然とした立ち方だね・・・。「ん、そこまで解釈しなくつていいんじゃない。「山が動いて来るんだから相当な感動だね。「まとまつてますね。「さつきの「こうとしかいえない」表現というのに関連するけど、自分がいくら感動していても相手に伝わらない句つていうのがあるよね、いやむしろその方が普通だね。だからやつぱり活字にして他人にみてもらおうという気持ちがあるなら、やはり親切なものほどこいい句ということになると思う。「いや、そうは思わない!」」

目薬をさし秒針を合わすくせ 父に似る

尚子

0点。「上句の「くせ」の内容に深い意味がなにかあるんだと思う。単にくせだつたら鼻糞ほじるくせだつていいわけだし・・・微妙な・デリケートな句なのだと思う。こういうのはじっくり読み返してからでない・・・句会の席ではなんともしえない。「上・下で説明しちゃつていい。あとボーズが安易だと思ふ。読者としてはなくたつていいように思ふ。どういう意味で置いたのだろう。「この句は、子供が父親をどう思つていたかをも表している。そのためのボーズだと思ふ。たとえば秒針を合わすくせのある父親、神経質な父親を子供はあまり好きではなかつたかもしれない。それが子が大きく成つて余裕をもつて父親を見れるようになったとき、はじめてこういう句が書けたのではないか。そのためのボーズだと思ふ。「おもしろいくせだね。「いやくせそのものは素材だから・・・。「しかし、これはさつき言つたように「鼻糞ほじるくせ」じゃ句にならないと思ふ。」

コンピュータぶつん少年髪を逆立てるの忘れた

尚子

1点。「コンピュータがぶつんとき髪が逆立つのではなく、「逆立てるのを忘れた」ところがおもしろい。俳句は、よく言葉と言葉の衝撃にともなう新しいイメージの発見だといわれるが、そういう意味からいえばこの句は非常に俳句らしい。「ちよつとつくりかたのへたなところがある。これはどこかで空ける(ボーズ)ところがあると思ふが・・・。「コンピュータ」と「ぶつん」の間か、「ぶつん」と「少年」の間かどこで切つたらいいか迷つただけ・・・。「この句の良さは、俳句はこういうものだって決め付けられないで作つている世間知らずで作つているところだと思ふ。そういうこと

は絶対に必要だと思ふ。今、たとえは香風林なんかで、そういう句つていうのは絶対ダメでしょう。層雲の自由律俳句はこういうものだという、合わせていくのがいい方に見られる。それに反抗するものがない句だと思ふ。「わたしは俳句とは、ということ意識して作っている。しかし、層雲の句がこういうものだ」とわかつたとして、それに合わせていく作り方をするだけだつたらとてもつづかないだろう。自分がいいと思ふものが「俳句」なんだと。既成のものがこうだからあえてそれから外れようというのは、一挙に超越しようとしたりする必要はないのではないか。たとえは自分がつくつたものがたとえかこにだれかが似たようなものをつくつていたとしても、それは自分がここまで進歩したのかと思えばいいんで、さつき出たような「こうとしかいえない」という信念をもつていればたとえ陳腐といわれてもとりあえずはいいと思ふ。ただ層雲として新しいものをどんどんつくつていかなければという使命感から考えれば、そういうのつてのは情けないんだけれど。今(昔と違つて)層雲の俳句とは何かつていう「俳論」は表に出していないと思ふ。作品では出ているのだろうけど。俳論はもつと必要だと思ふ。俳論を出したときにその人の作品がみすばらしく見えるつてことがあるよね。だけど、俳論は一種の理想を述べるのだから現実の作品がみすばらしく見えたつていいんじゃないか。そうじゃないと、こう言つちや何だけど井泉水だつてそうなつちやうでしょ。「出せば必ず載るの?」「内容によつて否定つてことはあまりないと思ふ。今の編集方針なら出せば載せてくれると思ふけど。」「もつともあんまり過激なのはないのかな?」「今の層雲を百パーセント否定するとか?」「でもそれでだめだとはいわないでしょ。個人の考えが尊重されているみたいだから。その人がそういつたからつてすぐ層雲がそうなつちやうわけではない。むし

五

ろ一つの起爆剤になるんじゃないか。「今の話からずれるかもしれないけど、三月号の香風林の句評で、添削に不満をもつ人に対して、「層雲はあなただけのものではない」という発言があつたが、これは問題だと思つた。添削をいやだといつた人は層雲が自分だけのものだと思つて言つたわけではないだろうし、ああいう後記の形で書かれると何も言えなくなつてしまふ。(層雲を知らない)友人に見せたら、むしろそういう添削の方が私物化しているんじゃないのか?といわれた。「たとえは切り詰めるべき言葉があるというので、削られるのはわかるけど、短いのが長くなるつていうのはどうかと思ふ。そうするとそのまま原作者がつくつたものとして発表されてしまふわけだから。失礼といえは失礼なことと思ふ。本人の了解をとるシステムにはなつていないわけだし。しかし選者の熱意というのでも理解しなければ。」「入つたばかりの人にも非常に丁寧に指導してくれるし、趣味すら感じる。添削されること自体そんなにいやではないが、たとえは「こうすればやわらかくなります」と書かれたことがあつた。でも原作者としてはやわらかくしたいわけではないから、そのところを間違えてほしくないと思つたことがある。「添削制度をやめてしまつて、選評だけにしたらどうか?たとえはいまの話だつたら、「たとえはこうすればよくなりませよ。」というヒントだけいつて、ポツにして原作者に突つ返してしまふ。本人が納得してもう一度投句すればいいし、いやだと思つたらどうしてもこれでという形でもう一度出せばいい。そのときまた採るかどうかは、任されていゝる選者の判断だと思ふが。」「添削に関しては何つとも同じような不満をもつている人がいるみたいだけれど、(原作者が)そのぐらゐ反発心をもつているのはいいことだね。それにしても香風林は発表の場というより、勉強の場」だとおもうけれど。ここ(句会)は勉強の場だと思ふけど、お

金を払って会員になつてゐるのはやはり発表しようとして（雑誌を）とつてゐるわけだから、そこには読者と選者にずれがある。」

札ピラきつてから一週間分のストッキング干す 尚子

1点。「あつという句だと思ふ。こういう上下のくつつけ方つてのはむずかしいよね。相当大胆な気持ちでやらないと……。」もし作者が女性だとしたらわりとこういう面てよくわかる。あるところでパーツとムダ使いをするくせに一方で百円ぐらいからあるストッキングを一週間分捨てもしないでだいに洗つて干すつていう、そういう面をうまく切り取つてゐる。切り口がスパツと決まつてゐる。「こういう、なかなか他の人が真似できない句が大切だと思ふ。」現代の女性の性格をよく出している。「絶対男には真似できない句つてのがあるよね。そういうのは非常に新鮮に感じる。」「こういう感傷のまつたくない、センチメンタルのない句をみるとおもしろい、いいなと思ふ。わたしなど思い入れが強く……。」「いや、思い入れも必要ですよ。層雲以外の俳誌をみると思い入れがないものの方が多しと思ふ。そういう意味ではこういう感じの句は他の俳誌でもあるかもしれない。自由律俳句のなかでは層雲は思い入れの強い句が多いんじゃないかな。皮肉を言つてゐるわけじゃないけど、義理人情というか。でもそういう主観的なものをいれられるということに層雲のプライド・存在価値もあるように思ふ。まあ、そういう句ばっかりでもないやになつてしまふ、疲れちゃうけど。たまにはもうちよつと肩の荷をおろさないよ、とか。少し不真面目になれば、といたくなつたり。」「そこはむずかしいところだね。その人その人の生きざまがでるわけだから。」

六

犬走る新しき地に イヌフグリのブル―透けて あきら

0点。「イヌフグリの感じといい、矛盾したところがぜんぜんない。」「ストリートに一読してすぐわかる。」「ブル―透けて」つていうのは言い過ぎのような気がするが。「イヌフグりは春のいちばん早い花で、これを書いた頃はまだイヌフグリしか咲いていなかった。まるで氷が張つたみたいに地面が透き通つて見えた。その感じを出したかった。」とすると、わかりやすく散文にすると、「イヌフグリのブル―透けて」いる「新しき地に」という意味ですね……戦前の句を見てみると実に巧みな入れ替えがある。昔の人は非常にいじくつてというか技巧をこらして句を作つてゐると思つた。「もし作者にそういう（氷のようにみえたという）思いがあるなら、もう少しそれを出してもよかつたんじゃないか。このまま一読しただけだと、イヌフグりはブル―なのは当たり前だし、それが淡いから透けてゐるといふことで、安易に解釈されかねない。」「に」を「は」にすれば作者の意志が内容的には伝わるかもしれない。「俳句でものを表そうとした場合、いままで自分がいかにテクニクを過小評価していたかに最近気が付いた。俳句つてかなりそのところ大事ですよ。」「いくら自由に作るといつても、言葉に制約があるわけだから。」「いくら感性・感情が豊かでもやはり技術は人の句を読んだり、さっきの添削の話と関係して教えてもらわなければどうしてもわからないものはあるとおもふ。」「長い文章だとテクニクにたよらない迫力という形で評価されることがあるけど、俳句をはじめて改めていかに自分が何をやつても技術が身につかない人間であるかを思い知つた。」「その関連でいうと、層雲の「時空間」の作品はどれもストリートに出すぎに思ふ。こういう

うのは実験的に必要だと思ふけれども、もう少し俳句とは何かというのにこだわりたい気がする。そのまんまなんでもポンポンと出てくると人それぞれなんだろうけど、ちよつとうんざりすることもある。「一投句が多くなつてもページを増やさないというのも、あくまでも実験でやっているんだからということがあるのかもしれない。」

新しい地で犬と空を見る 溶ける溶ける青さに溶ける

あきら

1点。「これは二行詩だと思ふ。」「二行詩と俳句の対比は自由律が二句一連だとすれば、形式論でも内容的にでもいけれど。」「ぼくは俳句・詩その間にあるのが自由律だと思ふ。個人的な考えだけれど。内容的にはもちろん自由律も詩だけれど、形のうえでは絶対に詩にならない。決定的なちがいは詩には題が一般的にはつく。とくに短詩の場合には題は重要だ。自由律では一応一句一句に題はつかない。この句を読んで非常に喜ぶ人がいるかもしれない。井泉水自身かなり二行詩をすすめていた。そういう意味で、これは自由律俳句というよりはむしろ二行詩だと思ふ。というのは自由律といえども俳句とするには、長さもさることながら、何かムダがないかなという気がする。」「文字数の問題じゃないけど、自分は二十字をひとつのめやすにして、それ以上多くなるとどこかにムダがあるんじゃないかと。音数はあまり気にしない。」「じゃあ感じにしちやえはいじやないか。」「いや漢字が多くなつても良くない。ぼつとみたとき漢詩みたいで。」「とくにこの句では下句がどうか、と思う。詩ならいいけど。」「言葉の繰り返しもこの場合成功しているかどうか疑問。」「のびのびと作っているから単純にいいと思つた。一種のあこがれもこめて。もし自分が原句で

七

こういうふうにつくつても文字数とかの関係で絶対どつかを削つたりするだろうし。・。・。こういうのがなくなつちやつたらつまらないだろうし。たとえば昌山人さんの句とか、敬雄さんの句とかをみると一読してストリートにわかる。俳句だとか詩だとかいぢいぢ議論しないで。ああいう句が層雲誌に何人か載っていると安心する。すべてじゃ問題だけど。何人かの人たちが入っていないと層雲の自由さというか、それが無くなつていつてしまふ気がする。そういう姿勢を残していつてもらいたいと思つて採つた。」「さつきの意味とは別に、変に人の俳句を勉強すると自分を見失うこともある。この句で言えば「犬と空を見る」といった世界を大切にしたい。」「こういう句が出てこない、選ばれないというのも、層雲に欠けているところかもしれない。」「だから同人欄には案外そういう句がある。のびのびとした。・。・。」

会えば無口なあの娘に愛想笑い浮かべ

聖 治

0点。「情景としてはすぐわかるが、心に残らない。」「それがどうした、という感じ。」「これはやつぱり散文なんだと思ふ。この内容で、さつきの「札幌」の句のような作り方をすべきなんだろうね。」

曇りガラス指で擦つてそつと外を覗く生徒

聖 治

2点。「女性が二人とも採つてますね。美女二人の選ということですか?」「作者のやさしさに胸打たれました。今、生徒にこういうふうな視線を注ぐ先生がいるということが信じられないことが多いなかで。・。・。」「先生が生徒を観察している気持ちと、生徒の窓の外を覗く心情とをあわせて表していると思ふ。」「生徒」といれてしまふと描写

句になる。いれなければ作者の行動となる。この人という形で気持ちや行動を人に載せてしまうのは、俳句としてあまり賛成できない。いい歳の人が外を見てたらばかみたいかもしれないが、そこが大切だと思う。」

手指死人のように組み夜の雨安らかに聞く

栄一

0点。「(詩ではないのだから)「死人のように組」むのだったら他の表現をしてもらいたい。」「もう少し言い方があると思うが・・・。」「この句はあまり好きじゃないのですが、それは俳句としてではなくて、表現をとおして生き方をみると、この人の人生観というか、死生観・宇宙観はぜひやめてほしい。自分の考えを押し付けるわけではないが、こう生きてほしくないと思う。」「どんな人生観?」「いちばん楽な所で自分の決着を付けてしまつてそれですましてしまふという、ちよつと見るとすごく崇高な魂と感じられなくもないが、何か欺瞞めいたものを感じる。」

辛夷灯のように咲いて静かな始発の入線

栄一

2点。「いかにも俳句らしい場を詠んでいるんだけども、「ように咲いて」という言葉。たしかに親切になるんだけど、でも、「辛夷が」という言葉があるんだから必要ないと思う。辛夷灯で十分だと思う。」「まとまって情景がよくでているし、「入線」という終わりがいんじゃないかな。」「着眼点がいい。」「辛夷灯のように」は逆に、操車上の灯りが辛夷のように・・・という見方もあるが。」「全体を通して・・・「今日はよく勉強しました。実験的な句も多かつたし。」「勉強したことを自分の句に生かすのは難しいけれどね・・・。」

おたよりから

「句報第一号をいただき本当に感謝しています。句評・後記等素晴らしい内容でございました。平田さんの石にかじりついても、青年句会を石にかじりついても永続させたいと思いません。では頑張りますよ。」(白雲子)

「前略 「青年句会報」拝受、有難うございました。出席者が少なく残念でしたネ。しかし内容的には充実しており、良き錬成の場となることでしょう。」

・大兄の「背広てれりと吊し寝そべって聞く妻の繰り言」の句、よくわかる句であり、構成上も申し分無いと思います。ただ、表現が上から下へ少し流れ過ぎている様で、句の屈折というか反発力が少々足りないのではないのでしょうか。生活句というのは応々にして流れ易い傾向にありますから、常にそれを意識して作句された方が良いと思います。但し、これはあくまでも小生の私見ですから。

・「香風林の方がわかりやすい・・・」(句会での意見)について

これは選句する選者の傾向に左右されるということもあり、また、初心者表現力が個性を発揮するまでに至っていないということもあると思います。わかる句が良くて難解の句が悪いとばかりは言えません。特に俳句のような短いセンテンスで表現する場合、その凝縮度の度合いにより、ある場合には鑑賞側の誤解により名句にも駄句にもなるのですから。

「句がわからない」というのは、一つには鑑賞サイドの識

力の未熟さであり、又反面には作者の表現力不足もあるでしょう。又、中堅クラスになると、これまでの表現にあきたらなくなり、より新しき創造へという意識がある為、かなり試行錯誤的な作品が多くなるのも否めません。しかし、それも創造的進歩への一過程であり、重要な要素だと思えます。芸術(「詩」)を志す以上は、常に先人を越えようとする気概をもつて進みましょう。もちろん独り合点はつつしみます。

これからも青年句会の運営、頑張ってください。まずはお礼まで」(踏青)

「句のわかりやすさという点、前回の句会で問題提起されました。このことについて、みなさんの意見を聞かせてください。」(梓)

「会報第一号ありがとうございました。綿密にまとめられているのでたいへんですね。さつそく趣旨にのっとりアフターケアというところですか?ところで一つ提案。互評の最後にも出席者は自分の句の句意・経緯などを明らかにしてもらったらいかがでしょうか。自分の作品を解釈する等愚だとは思いますが、他人様はどんなふうに向をまとめられるのかを知るのもいろいろ参考になると思うのですが・・・この会は発表の場より研究の場であるはず、普通ここまでではやらないので、ぜひお願いしたいと思います。それにしてもこの間の出句者のメンバーは錚々たるものですね。おじけつきませす。」

(久魚)

「会へのすすめ方はみんなで話し合っただけで徐々に改善していきたいです。出句者については、まだ入門者が少ないのでこの会の趣旨を考えた場合まだアンバランスかもしれないですが、

さらに声を掛けていくつもりです。まずは先輩方のリーダーシップを期待します。ご協力ください。(幸)

「とても有意義な会のように頼もしいかぎりです。……若い人たちがどんどん活躍してくださいと層雲も長続きしないでしょう。やつと世評でもぼちぼち自由律を認める気運が出てきたようなのでここは一つ皆で盛り上げていきたいものですね。……小生、大会詠草156人の方々からの句整理終え、いまは印刷所に行っています。」(直樹)

「雨の中、西行庵に行き、竹林の中の落椿を撮り一人西行の歌にひたりました。……自然のなかに居ると、自由律だの定型だのついつい忘れてしまいます。……」(一幸)

「拝啓、先日は句会、出られなくて本当に失礼いたしました。会報からも、小人数ながらよい雰囲気スタートで私も安心しています。……いい句会になりそうですね。」(尚子)

「……引つ越しのどさくさやエネルギーの消耗などで、2月25日をのがしてしまいました。残念です。次回から気をつけますので今後とも宜しく願います。」(マオアキラ)

「当句会の趣旨に呼応して出席者が増えることを(とくに周辺・近県の)期待いたします。又、私どものように、なかなか出席がかなわずとも参加意識がもてるような運営も、追

追い加えてもらつたらと思いますが……まずは周辺諸氏の句会参加が色々な運営の方法を得る基となることです。出席者が一人でも多からんことを願わずにはいられません。」(恵行)

後記

第二回の句会、出席者はまだ少ないですが、投句者も含めて、自由律への熱意は並々ならぬものが感じられました。一句一句をとことん論じたいという趣旨から、今回は「一または二句」ということで募ったのですが、ひとりで三句という方もおり、参加者の意欲を感じます。今回の句評は出席できなかった方のため、できるだけ生の声をという考えでテープ(たつぷり二時間半)を起こしながらの原稿なのでかなり読みにくいと思いますが、雰囲気を読み取ってください。文字にするのとけつこう過激になるもので、ご覧の通りとんでもない句評や誤解・生意気な発言が多々あると思えますが、しかし会の趣旨からいっても入門者がおおいものですから、そこはひとつ自由な雰囲気ゆえの結果だと善意に受け取っていただければ幸いです。他にない句会を、というところで最初の「ご案内」の趣旨にのっとり、入門者から中堅まで、気負わずマイペースでやっていきたいものです。前回も今回も一名ずつの新人が参加してください、他にない句会の雰囲気は少しずつ出てきていると思います。

今後先輩方のさまざまな御批判をお聞きかせください。

次回は六月二十四日(日)を予定しています。